

障害科学ゼミナール「ともにいきる」の実践報告 第2報：年刊プログラム構成の検討

著者	早貸 千代子, 菱山 玲子, 吉田 哲也
著者別名	HAYAKASHI Chiyoko, YOSHIDA Tetsuya, HISHIYAMA Reiko
雑誌名	筑波大学附属駒場論集
巻	55
ページ	139-157
発行年	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150909

障害科学ゼミナール「ともに生きる」の実践報告 第2報

－年間プログラム構成の検討－

筑波大学附属駒場中・高等学校

養護教諭*1・スクールカウンセラー*2・化学科*3

早貸千代子*1・菱山 玲子*2・吉田 哲也*3

障害科学ゼミナール「ともにいきる」の実践報告 第2報

一年間プログラム構成の検討一

筑波大学附属駒場中・高等学校

養護教諭*1・スクールカウンセラー*2・化学科*3

早貸千代子*1・菱山 玲子*2・吉田 哲也*3

要約

本報告では、高校2年生を対象に総合的な学習として実施しているゼミナール（以下ゼミ）「ともにいきる」の内容と、ゼミ生の感想を報告するとともに、年間プログラムの構成の検討を目的とする。本ゼミは2011年度に筑波大学附属特別支援学校の先生方や卒業生の話を中心に開講し、2期目は特別支援学校との生徒交流、ご家族や当事者の講話を加えて実施した。今回は、さらに障害科学分野の大学教員による障害の本質的な捉え方及びバリアフリー・当事者研究等の講義を加え、教育・交流・研究・社会の視点からアプローチを試みた。全8回中7回を終え、ゼミ生の活動の様子や感想から、障害（者）の捉え方を改め、障害理解を社会に広めようとする姿が見られた。ここでゼミの有効性の検証を行い、今後のゼミの課題・展開について考えていきたい。

キーワード：障害科学・共生・交流

1 はじめに

近年、特別支援教育への関心が高まり、関連して人間理解を基礎にした障害理解教育の必要性が高まっている¹⁾。また、高校生の正規の授業として発達障害を含む障害の理解や支援について取り上げる重要性が指摘されている(柘植,2010)^{2) 3)}。しかしながら障害理解教育は小・中学校での疑似体験プログラムや、大学の福祉や教育を専攻する学生向けの障害特性についての知識と支援等のかかわり方を学ぶ授業が多く、発達段階に応じて適切な障害理解の内容の検討・実施が望ましいとされている¹⁾が、高校でのプログラムはあまり見当たらない。

本校の高校生の障害（者）の捉え方をみると、視覚障害者が持っている白杖の名前も知らず「棒」と呼んでいたり、障害を持つ人との共生は大事であると理解はしていても避けて生活していたり、障害者を遠い存在、もしくは自分とは違う存在として受け止めている傾向がみられる。

このような状況で2016年4月から障害者差別解消法が施行される³⁾が、合理的配慮や共生社会とスローガンを掲げても、何をどうしていったらよいか、なかなか実感が湧いてこないのが実情であろう。

社会的な貢献を視野に入れた思考ができる高校生の時期に、障害に対する知識・経験の不足、誤解や偏見を解消し、社会は多様な人間で構成されるのが本来あるべき姿であるという知性と感性を磨き⁴⁾高校生一人一人に社会をつくる一員として「ともにいきる」社会を模索させることは大切である。また、真の障害とは何かを学び、建物などのハード面のみならず、人と人の間に存在する心的な「バリア」を取り除き、誰もが生活しやすい社会の構想、それを実現していくための原動力を培う機会と場を設けることの意義は大きい。

そこで、今年度(3期目)のゼミでは、今まで(2011・2014年度)を踏まえて、①講義、②疑似体験、③交流及び共同学習の3部構成を教育、交流、社会、研究のそれぞれの視点から学べるように企画した。特に「かかわり」の中で「ともにいきる」社会を一緒に考えるというプロセスをもてるように、児童生徒の交流を増やした。また、発達障害やバリアフリー・当事者研究等の最新の動向・研究を学べる機会や障害（者）に理解ある卒業生の講話を設けた。

具体的には、障害とは何かという「根本的な問いを考える講義とグループワーク」から始まり、「障害の基礎知識を学ぶ講義及び疑似体験と生徒交流」「同世代の

ハンディを持つ A 君と家族の講話」「当事者であり経営者（社会人）としての講話」「当事者であり研究者としての講話」「障害（者）に理解のある本校卒業生の講話」と多岐にわたるアプローチを試みた。

本報告では、2015 年度開講した 7 回分（全 8 回）のゼミの紹介と生徒の感想を報告するとともに、今年度のゼミ構成の有効性と今後の課題について述べたい。

2 2015 年度 ゼミ「ともにいきる」

2.1 教育課程上の位置づけ

高校 2 年の総合的な学習の時間で実施している。

2.2 日程

土曜日を活用し、年 8 回開講している。2015 年度のゼミの日程および内容は以下のとおりである。

【オリエンテーション 05/09】 3～4 限

ゼミごとのプレゼンテーション（10 分間）

【第 1 回 06/20】 3～4 限

筑波大学特別支援教育研究センター教授
大塚特別支援学校長 柘植雅義先生

「障害とは何か？発達障害とは（総論）」

【第 2 回 06/27】 1～4 限

桐が丘特別支援学校 城戸宏則先生
「肢体不自由の運動・認知特性と車椅子体験」
元桐が丘特別支援学校 A 君とご家族
「ハンディ持ちの A 君及びご家庭からの話」

【第 3 回 07/14】 学校訪問（1 日）

聴覚特別支援学校 鈴木牧子先生
「難聴疑似体験学習」
「高等部生徒と交流」

【第 4 回 09/19】 3～4 限

視覚特別支援学校 寄宿舎指導員
飯島美帆先生・高橋弘和先生
「視覚障害について」「弱視疑似体験学習」

【第 5 回 10/03】 学校訪問（半日）

視覚特別支援学校 飯島美帆先生
「寄宿舎 高等部生徒（有志）との交流
生春巻きを一緒につくろう」

【第 6 回 11/14】 訪問学習（3 時間）

東京大学先端科学技術研究センター
児玉龍彦教授（本校卒業生）
福島智教授（筑波大学附属盲学校卒業）
熊谷晋一郎特任講師
「先端研でバリアフリーや当事者研究を学ぶ」

【第 7 回 01/09】 2～4 限

聴覚特別支援学校（聾学校）卒業生、
ありがとうの種及び Social Cafe
Sign with Me オーナー、柳匡裕氏
「ろう者が起業するということ」
東京大学医学部医学科 6 年辻賢太郎（本校卒業生）
鉄門手話の会代表
「聴覚障害と医療—その溝を埋めるには—」

【第 8 回 01/23】 3～4 限

大塚特別支援学校小学部 駒場高等学校訪問
「ジャグリング・和太鼓ショー」
「科学実験を一緒に楽しもう」

2.3 ゼミの特徴

今年度は、2011 年度・2014 年度のゼミの内容⁵⁾に加えて、筑波大学人間系障害科学域の柘植教授の「発達障害の理解、障害に係る基本的な問い」や本校卒業生が所属する東京大学先端科学技術センターの先生方による「バリアフリー」「当事者研究」等、障害科学分野の最先端で活躍する先生方の講義、卒業生の手話学習者からの講話を含めて企画した。

以下、生徒に紹介した 5 つの特徴である。

- ①障害種別すべてに対応した我が国最大の障害科学系教育機関である筑波大学附属学校ならではの講師陣（視覚・聴覚・桐が丘・大塚）。
- ②特別支援学校へ訪問し、児童・生徒たちと交流・障害疑似体験などを通して、かかわり方の基本を学ぶプログラムがある。
- ③ハンディを持つ A 君（高校 2 年生・肢体不自由）・ご両親・兄（本校卒業生）から話を聴く。
- ④東京大学先端科学技術研究センターの児玉龍彦教授（本校卒業生）、福島智教授（全盲ろう）、熊谷晋一郎特任講師（肢体不自由・小児科医）による「先端科学とバリアフリー」「当事者研究」の講話。
- ⑤有志のみ 7/28-7/30 に黒姫高原にてインクルーシブ合宿を予定。

2.4 ゼミオリエンテーション

2015 年度のゼミ開講は 10 講座（国語、地歴 2、数学、化学、生物、保健体育、美術、英語、障害科学）であった。これらのゼミ担当者が、高校 2 年生（65 期生 162 名）を対象にゼミ紹介（各 10 分）のプレゼンテーションを実施した。

本ゼミのオリエンテーションでは、ゼミの特徴（2.3）日時と各回の紹介と 2014 年度のゼミの様子（写真）

や感想をパワーポイントで視覚的にイメージしやすいようにした。最後に、障害は決して他人ごとではない、自分や自分の身の回りで障害は起こりうるもの、まずは障害を知ることから始め、一緒に体験し、学ぼうという語りかけをした。

2.5 ゼミ人数

オリエンテーション後、希望調査を行ったところ、志望者数は25名であった。

2.6 ゼミ生志望理由

本ゼミを希望した生徒の志望理由を見てみると、障害者や障害者の生活を知りたい、「点字や手話ができるようになりたい」「訪問などが楽しそうだから」等、障害(者)に関心のある記述が多くみられた。

また、「共に生きることの重要性を感じつつも今まで避けてきた自分を振り返りたい」「普段の生活で障害者と会うことがないこと自体を問題に感じている」「現在の高校カリキュラムには障害を学ぶカリキュラムがない」等、今の自分の生活を問題視して、このゼミを志望している記述が見られた。さらに、「社会に貢献したい」「医療関係の仕事に就きたいので知りたい」「ユニバーサルデザインやソーシャルデザインを考えたい」等、社会を変えていくことは自分たちの責務だと捉え、志望する記述があった。

以下、印象的な志望理由の一部を紹介する。

- ・聴覚特別支援学校の生徒と一緒に昼食をとったとき、コミュニケーションも筆談という形であったが、健常者との対話とほぼ変わらなかった。今まで遠い存在のように思っていたが、彼らの趣味などを聞いているうちに、身近なように感じ、「障害者」に興味を持つようになった。僕らと障害者はどこが違っていてどこが同じなのかをもっと知りたい。
- ・とても優秀な生徒たちに囲まれ、かなり閉鎖的で一面的な部分しか見ることができない。普段の生活では、あまり触れることのない世界に触れることで、新たな物の見方を得られるだろうと考えた。一般的に社会的に弱いとされる人々への対応も、ゼミによって変えられるのかもしれないと期待している。
- ・五教科の勉強は確かにできるようになるが、果たしてそれだけで社会に出て、本当にいいのか。しっかりと勉学を積んできたものとして、助けられるべき人たちのことを学生の間知っておくことは、当たり前のことだと思う。がしかし、現在の高校のカリ

キュラムにそういったことは、残念ながら含まれていない。ゼミで補ってほしいと思う。

- ・今の社会では、まだまだ障害者への配慮が足りないなど思っているの、何かしらできることはあるのか、探してみたいと思う。
- ・多様な人々に対応したソーシャルデザインの創造や先端テクノロジーを用いた技術開発に元々興味がある。また、普段関わることの少ない人々と直接触れあってみよう。
- ・障害者の人と話すことで、どう生きていき、どういう壁があって、生活しているのか知りたい。バスで自閉症にあたりするが、彼らが普通の人と同じように生活しているのがすごいと思ひ、彼らが学校でどのように過ごすのかを知りたい。

3 各講座内容

3.1 第1回(2時間)

筑波大学特別支援教育研究センター教授
大塚特別支援学校長 柘植雅義先生

初回は、特別支援教育の研究者であり、附属大塚特別支援学校の校長である柘植先生に、障害とは何か？や社会の最新の動向等を語ってもらい、障害(者)への関心を一層高めることをねらいとし、講義とワーク・プレゼンテーションを実施した。

なお、第1回部分は、筑波大学附属大塚特別支援学校2015年度紀要に掲載されるので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは、講義・ワークの概要と生徒の様子・感想を述べる。

3.1.1 講義(前半)「障害とは何か？発達障害とは何か？～向き合い、ともに生きていくために～」

前半の講義内容は、①「障害とは何か？」「発達障害とは何か？」という問いは難しい。「発達障害と才能」、②個人と環境の相互作用、③親の障害(者)に対する思いと変容、④現在、障害を取り巻く状況、⑤高校生への期待「人とともにあり、人の前進を助けることが、リーダーの役割だ」について語られた。

ゼミ生は講義を通して、障害者は10%、発達障害の可能性のある児童生徒が通常学級に6~7%の割合で存在することに驚いていた。「発達障害と卓越した才能が併存することがあり得ること」や「同じような障害でも環境によって困難が大きく変わること」「障害者への配慮が個人の思いやりだけでなく、法的に規制され

る時代になってきている」等、新しい知見を学んだ。また、自分と障害者は何がどう違うのか、共生社会の最終的な到着地点はどのような社会であるのか等を深く考究する様子が伺われた。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

【講義の感想】

- ・障害者を見る色々な切り口があることがわかった。
- ・何をもって障害とするかは難しい問題だと思った。
- ・「障害」の定義についてももっと考えたい。そこをしっかり考えれば、全体像が見えてくると思う。
- ・スピルバーグ氏が障害を持っていたことに驚いた。
- ・障害を語る上では、環境や状況などを通して具体的に考えることを学んだ。
- ・「差別的取り扱い」と「合理的配慮」の境目は何か。
- ・明確な答の存在がない、障害科学は難しい。

3.1.2 グループワーク（後半）

後半は、約6人の4グループに分かれて、協議（約30分）を行い、グループごとのプレゼンテーション（各3分）を実施した。

各グループに与えられた4つのテーマは、問1「障害者の価値は何か?」、問2「知能は高ければ高いほど幸せか?」、問3「個性はこの世に本当に必要なものか?」あるいは「障害は個性か?」、問4「多様性のない社会はあり得るのか?」あるいは「障害者の差別・偏見・誤解はなくせるのか?」であった。

準備された参考図書やインターネットを活用し、まず各テーマの用語の定義から始め、議論を深めて行った。それぞれの班が白板を使用し、キーワードをあげ、概念図を書きながら、活発な話し合いをしていた。話が広がりすぎて、行き詰まる班もあったが、柘植先生に同行した大学院生のアドバイスで、具体的な事象を想定しながら話をまとめていた。

今まで「障害」について議論をしたことがなかったゼミ生は、障害を考えるうえで今回の協議は有効であると受け止める生徒が多かった。また、障害を考えることは人間としての問いであることに気づき、健常者と障害者と区別することに疑問を持ったり、障害者自身はどのように感じているのか、障害（者）に対しての関心が高まる様子が見られた。中には、答えのないテーマに苦戦しつつも、「もっと掘り下げて考えてみたい」「もっと議論の時間がほしかった」「各班別々のテ

ーマを議論するのではなく一つのテーマを各班で議論し発表し合いたかった」という意見もあった。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

【ワークの感想】

- ・全体の「概念」をつかむのは難しい。人間という種を考えることにもつながり、結論は導けなかった。
- ・障害は個性（Individuality）の一つであるから、それ自体良いことでも悪いことでもないのではないか、逆にそれがあからこそ、考え方の多様性が生まれてくるのではないか。
- ・「個性」と「障害」それ自体や関係性について理解を深められた。
- ・「障害」自体はマイナスであるが、「障害者」はマイナスではないということが印象に残っている。
- ・できないことによる利点もあるというのが新しい発見であり、とても重要なことであると思う。
- ・「障害」というものは何故偏見が持たれているのか。自分と違うものには否定的感情を持ちがちである。
- ・障害者の自由って何なのか?

【全体を通して】

- ・初回から障害者について深く考えることができ、面白かった。
- ・障害に関して考える機会がないので、このような議論ができてとてもよかった。
- ・他者との違い、自分の価値を考えさせられた。
- ・障害者に限らず、人間に価値つけすること自体かなり難しいと感じた。
- ・障害の存在について、自分の身近で具体的な経験をあまりしたことがないのでよくわかっていなかったが、今回、身近なものだと感じた。
- ・こういった問題は、絶対的に正しい答えはないと思った。もっと事例や人に焦点を当てて、考えていく必要があると感じた。
- ・障害者を「自分とは違う」と勝手に認識していた。自分の考え方をもう一度考え直したい。
- ・自分の障害に関する固定概念を見直していきたい。

3.2 第2回 肢体不自由について（4時間）

3.2.1 第一部

桐が丘特別支援学校 城戸宏則先生

元桐が丘特別支援学校 A君（高2）とご家族

「ハンディ持ちのA君及びご家庭からの話」

城戸先生は1期目からゼミを担当している先生の一

人で、A君が桐が丘特別支援学校に在籍中、教育相談等がかかわりがあった先生である。

A君は本校卒業生の弟で、肢体不自由と知的障害があり車椅子生活をしている。A君とご家族からはそれぞれの立場より、A君の生い立ちやA君との生活で感じていることをはじめとして、本校のオストメイトや文化祭での動線等、ゼミ生の関心のある内容を盛り込んだ話をしていただいた。城戸先生からは、A君ご家族からの話の中で必要に応じて専門的な立場からの解説をしていただいた。

以下は、A君のご家族から提供された話題である。

<A君から>

【自分の障害に気づいたきっかけ】

「自分より小さい子から何故車椅子に乗ってるの?」と聞かれて、自分の車椅子生活について知りたくなり、医師から聞いた。

【医師から説明を受けて思ったこと】

「障害の説明を受けて、ショックを受けたり、悲しく思うことはなかった。出会いを大切に、自分の体と上手に付き合いながら生きていこうと思った」

<母親から>

「同じ高校2年生、同じところと違うところ→実は違いは少ない」「幼少期からの訓練・装具」「車椅子の種類や成長に伴う車椅子の買い替え」「慣れや努力だけでは克服できないもの」「母の思い」「小学校入学時、4校に断られた経験」「筑波大学附属桐が丘特別支援学校での生活」「都立学校への転学について」

「立って歩けるといいなという思い」「ロボット HALとの出会い」「趣味は人生を豊かにする、野球・バスケットボール」「人とつながると楽しい。LIFE IS GOOD」

<父親から>

「答えがない質問を3つ、「道路」「駐車場」「文化祭」の問題」「車椅子を社会で見る機会が少ないのはなぜか」「横断歩道の断面図」「ある朝の通学路の動画から見える車椅子の困難」「電動車椅子で本校に来校した際の動画から考えるバリアフリー」等、身近な社会で起きている問題を浮き彫りにし、考えるきっかけとなる話題提供があった。

答えのない質問 (大問3つ)

【道路について】

道路の構造は経験・コスト等を考慮して定めてあるが、車椅子生活者にとっては必ずしも使いやすいとは言えない。

Q1 障害の有無に抛らず、万人を満足させる道路の構造というのではないのか?

Q2 なぜその構造にできないのか?

【駐車場について】

日本では障害者マークには法的効力はない。配慮してあげてくださいという意味。量販店でも購入可。米では処罰(罰金)がある。本来必要な人が必要な時に使えるマークや駐車場であるのが理想だが・・・

Q3 (誰が,) どうしたら、あるいは何をしたら、その目的が達成できるのか?

Q4 日米の違いはどこから来ているのか?

【本校文化祭について】

車椅子の人が①一人で行ってみたいと事前に連絡があったら、②突如来校されたら、どうしますか?

Q5 どう対処するのがよいと思うか?

Q6 このケースの場合、「合理的配慮」の実施というのはどの程度だと思うか?

<兄(本校卒業生)から>

「3歳離れた兄として、障害を意識しない日々」「親のためにいい子でいた時期」「余計な同情を買いたくないという思い」「障害という言葉への嫌悪感(障害ではなく、ハンディ持ちという捉え方)」「障害者とかかわるときの心構え・コツ(経験・観察力・忍耐・想像力)」等を語ってくれた。

城戸先生からは、ご家族の話の内容に応じて、専門的な立場から、「障害のある人は障害を意識して生きていない」「肢体不自由があるから「夢」「趣味」等できない、と周囲が言い続けてきたのは間違い」「頑張らない(家族も本人も)が今の障害理解の主流」「障害があっても(車椅子の)機能性よりデザイン性で選ぶこと...我々と変わらない」等、障害(者)の理解が深まる解説があった。また、脳性麻痺により、多くの情報や複数の情報を同時に処理する難しさがあ、情報の一部が欠落することがあること、全体がつかみにくく部分視しかできない等の「感覚や認知特性」の説明があった。自分でやれることはやりたいと思っているが、一つ一つしか動作ができないため時間がかかる等の「動作や姿勢の不自由さ」等、肢体不自由の障害特性の話があった。

ゼミ生は、「本人や家族はハンディを気にしていない、マイナスイメージをもっていない」「自分でやれること

はしたいと思っている」等の思いを知り「勝手にかわいそうだと思ってはいけない」「いつも自分たち目線でしかものを見ていない」と誤った認識を改める姿が見られた。また、「車椅子生活が大変なだけでなく、脳の機能不全によりハンディを抱えている」ことを知り、「これらの内容は学校で教えるべきである」「障害者に関する教育が足りていない」と意見を述べていた。

また、父親からの「問い」では、道路の構造や本校校舎のバリア、文化祭での困難感など、普段見慣れた風景を車椅子生活の視点で考えるきっかけになった。さらに、兄の話の聴いて、「障害」ではなく「ハンディ持ち」と書き換える生徒が多く見られた。今年度においても、様々な関係者の視点で語られた本講座は障害科学を理解する上で意義深いものとなった。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

- ・今日学んだようなことを知らなければ、車椅子の方に間違った接し方をしてしまう。これらは学校で教えるべきではないか、そうすれば、人々がより暮らしやすい社会が来るのではないかと感じた。
- ・車椅子にとっては点字ブロックがバリアになると聞き、人によって、快適な環境が違うので、すべての人に快適な環境を作るのは難しいと感じた。
- ・駅の切符売り場の画面は下から見ると見えないというのは普段全く思いもしなかったのが驚いた。
- ・A君自身は、「自分に障害がある」という意識はないのに、自分は「障害がある人」として見てしまうのが悲しくなった。こういう自分の見方によって、不快に感じたりすることがあるなら、自分はいったいどういうふうに接していけばいいのか。
- ・自分はハンディ持ちの人やその家族を大変だったとか苦労したとか考えていたが、予想以上に本人は気にしていないことを強く感じられた。健常者が「障害」を意識しすぎないことが大切だと感じた。しかし、お父様の話から、苦労が全くないというのはむしろ嘘でもあると思った。特に「誰かにとっては必要でも、誰かにとって不要である」という身近に例が思い当たり、印象に残った。誰にでも必要なものを目指すことが、これから日本に大切だと感じた。
- ・車椅子が、「かっこよさ」重視であったり、障害のある方が本当は全部自分のことは自分でやりたいということを知って、意外だった。また、見た目ではわからない障害者（ペースメーカーをつけた人等）もいて、バリアフリーも複雑であることを初めて知って、難しい問題だなと思った。

3.2.2 第二部 桐が丘特別支援学校 城戸宏則先生 「肢体不自由の障害特性～車椅子体験を通して～」

車椅子体験では、肢体不自由による重心の位置や車椅子の不安定さ等の「姿勢や動作の不自由」の疑似体験や、車椅子に座っている人に対し、数人で取り囲んでじっと見る・集団で迫る等の車椅子生活で日常的に感じる状況を体験した。これらの体験を通して、車椅子生活における圧迫感・恐怖感や身体的・精神的負担感に対する理解を深めることができた。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

- ・バランスクッションを置いた車椅子に乗った際、バランスをとるのが非常に難しかった。
- ・急停止する際に加速減速への弱さを大変感じた。車椅子のベルトの重要さを感じられた。ただ、ベルトをつけていても基本的に長時間車椅子に座ることは背中・腰を痛めそうとも感じた。
- ・車椅子はデザインもそうだが、機能にもまだまだ改良の余地があると思った。
- ・車椅子に乗っている人の気持ちなど、自分は全く分かっていないことがわかった。

3.3 第3回 聴覚特別支援学校訪問（1日）

3.3.1 第一部 高等部 鈴木牧子先生

「難聴疑似体験学習」

鈴木先生は今年度高等部1年の担任をしており、開講当時からゼミを担当していただいている。

鈴木先生の講義では、昨年と同様、「聴覚障害への思い込みや誤解」及び「情報を正しくかつ十分に得ることができないことによって生まれる「社会的バリア」の話があった。

読話では、「口形の似ている言葉」「日常よくある会話」を読み取る課題に取り組み、「手がかり・情報の活用」「口元も見えるように話す」「普通の速さで心持早めに」などのコミュニケーションのコツを学んだ。

難聴疑似体験ではノイズが入っているヘッドホンをつけて、「誕生日順に並ぶ」「グループごとに指示された絵を書く」「自分の持ち物の中で一番高価なものを提出する」などの課題に取り組んだ。

なお、ゼミ生が体験した疑似体験に関しては、「聴覚障害生徒を対象とした「難聴疑似体験プログラム」の実践⁶⁾の2を参照していただきたい。

ゼミ生は読話では「口形だけの会話の難しさ」や「集中力が必要」「常に疲れが伴う」等を体感できた。疑似

体験では、思っていた以上に聞こえないことに驚き、「取り残されている感じ、不安、つらい、恐怖、さみしい、悲しい、恥ずかしさ、申し訳なさ、あきらめ、孤独感、疎外感、ストレス、どこで話しているのかわからない、命にかかわる」等、多岐にわたる困難さや心的な影響を感じていた。また、「ゆっくりはっきり喋ればわかりやすい」「親身になって教えれば伝わるものが多い」「自分が聞こえているのと同じように聴こえていると限らない」の気付きがあった。これらの体験より、「健聴者だけで笑わないようにしたい」「伝わっているか確認しよう」「会議の時には円卓がよい」と具体的な配慮を考えられるようになっていた。さらに、聴覚障害者に対して「物が見えるだけ、まだどうにかなるかと思っていた」ゼミ生も認識を改め、「社会での聴覚障害への関心を高め環境を改善させることが大切」と述べていた。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

- ・音情報がどれだけ大きな情報であるか、改めて気付いた。
- ・感覚一つ失っただけで世界がこんなにも変わるんだなと思い知らされた。
- ・車の音やアナウンスの音も聞こえない状態は、生命にかかわる。
- ・唇だけで会話をするのがいかに難しいか理解した。
- ・相手の言っていることのすべては理解できないし、取り残されていると絶対に感じてしまう。
- ・相手の言うことがわからないだけでなく、自分の言っていることが相手に伝わっているかどうか分からず、会話をするのはとても難しかった。
- ・周りで何を言っているのか、ほとんどわからず、しかもどこで会話が行われているかわからなく、取り残されたような少し淋しいような気持ちになった。
- ・大勢の中にいたら大変だろうと思った。
- ・耳が聞こえないと相手が何を言おうとしているのかを理解するのに何10倍もの時間がかかった。
- ・自分の声の代償（聴覚的フィードバック：著者解釈）がなく大きな声でしゃべりすぎた。
- ・コミュニケーションがうまくいかず、「どうでもいいやー」と思った。
- ・難聴の程度によっては質問できないことも考えられ、コミュニケーションをとるのは困難であろう。
- ・耳が聞こえている人たちだけで笑っているのを見て、自分だけ輪に入れず悲しかった。不安に感じた。
- ・常に周りに神経を使って口の動きをみななければいけ

ず、難聴の困難がわかった。

- ・難聴者体験の際、「怒っている」と思われた。同じように勘違いされることも多いかもしれないと思った。
- ・ちょっとした視線や表情の変化が相手を傷つけてしまうことを身をもって体感した。

3.3.2 第二部 聴覚特別支援学校 「高等部生徒（1・2年）との交流会」

交流はランチタイムから始まった。ゼミ生が高等部1・2年の各クラスに入って、一緒に昼食をとった後、それぞれの学年で交流体験を実施した。

高等部2年では4つの班（高等部生徒・ゼミ生それぞれ3名が1チーム）に分かれて裁判ゲームを行った。裁判は1965年に実際に起こった「蛇の目寿司屋事件」を題材に健聴者側・ろう者側の主張を各班でまとめて発表し、最後に全員で判決を行った。高等部1年ではパワーポイントによる聴覚障害についての説明や自己紹介の後、読話対抗ゲーム、フリートークを行った。

ゼミ生のほとんどが高等部生徒に対し、普通の高校生だと感じ、学校生活を楽しんでいる様子や明るくて好奇心旺盛な姿に驚いていた。最初はうまくコミュニケーションができるか不安を抱え緊張していたが、人工内耳や補聴器、筆談により思いのほか話ができることがわかり、会話が弾む様子が見られた。裁判ゲームでは皆で力を出し合って考えをまとめ、交流の中で手話を覚え使えるようになったゼミ生もいた。その他、手話で会話するろう者の中で、聴者であるがゆえの“マイノリティによる疎外感”を体験したのもいた。

これらを通して、「今まで先入観だけで身構えていた自分を恥ずかしい」と感じたり、「障害者になんとなく近寄りたくないイメージや不安を持ち、コミュニケーションを避けていたことが完全に偏見と誤解であった」と障害（者）に対する認識を改めていた。これを機会に「今後、ろう者に話しかけたい」「個人によって聴覚に差があることを考慮した社会づくりが大切」と考える姿勢も見られた。交流後の感想では、楽しかった、良い時間を過ごせた、もっと話したかった、また交流したい、と多くのゼミ生が述べていた。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

- ・聾学校の生徒との交流というよりは、普通の高校生の交流といった感じで非常に楽しかった。みんな面白い人たちばかりで、もう少し話できたら良かった。またこのような機会があれば、行ってみたい。
- ・テレビ見たり音楽聞いたりゲームしたりやっている

ことも普通だった。

- ・筆談の際に口語体で「～だよーっ！」等、とても自然に紙面上で会話できて楽しかった。イメージより簡単に交流できることがわかった。
- ・手話を使えないのに、聞き取ってくれたり、話してくれたり、助かった。
- ・僕らは、「五体満足だが心は不満足」だということである。支援学校の生徒はみんな生き生きとした目をしていて、どんなことにも積極的に参加していたし、僕たちよりもはるかに好奇心旺盛だった。このような一日を体験できたことを誇りに思うとともに、僕と同年代のみんなが、一生懸命に頑張っている姿を見て、負けれないなと思った。

3.4 第4回 視覚障害について (2時間)

視覚特別支援学校 寄宿舎指導員

飯島美帆先生・高橋弘和先生

「視覚障害について」「弱視疑似体験」

視覚特別支援学校の高等部生徒（寄宿舎生）との交流会（第5回を参照）の事前学習として、視覚障害の講義と弱視疑似体験を行った。担当は寄宿舎の指導員である飯島先生と高橋先生に依頼した。

前半の講義では、「視覚障害の概論」「目の機能」「見えない人≠全盲」「弱視とはどういう障害か」「弱視の見え方」「全盲より弱視の方が理解されにくく、大学や社会人になって理解されずに苦しんでいる方が多い」等の障害の基礎知識を学んだ。

後半は、5人グループに分かれて、弱視（ロービジョン）疑似体験を行った。複数ある弱視の見え方から「透光体混濁・白濁（塗り絵）」「視野狭窄（点つなぎ・迷路）」「屈折異常（文字を読む）」の3つの見え方を体験し、それぞれの困難点と配慮点を学んだ。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

- ・体験してみないと障害のある人の気持ちは全く分からないと感じた。色々な視覚障害があるが、それぞれ症状が全く違うので、対策も一人ひとり考えていかなければならないのが難しいところだと思う。
- ・視覚障害と一口に言ってもたくさんの種類・程度があることを知り、その中の3種類を実際に体験することで、それぞれの困難や晴眼者がどのような配慮ができるのか身をもって知ることができた。
- ・弱視は字を大きくいした方が読みやすいと思っていたが、視野が狭い場合、逆に小さくした方がいいと

分かり、弱視にもいろいろあるんだと思った。

- ・視野狭窄がつかった。実際に目に障害がある人が、どんなふうに住んでいるのか知りたい。
- ・予想していたよりも視野が狭くなり視界がかすんだりして驚いた。普段からこの視界・視野では生活が困難だろうと強く感じた。周りの助けが大事と思う。

3.5 第5回 視覚特別支援学校 訪問 (半日)

寄宿舎 高等部生徒（有志）との交流会

「生春巻きを一緒につくろう」

第4回に講師をして頂いた飯島先生と高橋先生のコーディネートの下、寄宿舎食堂にて高等部生徒との交流会および全盲体験（料理）を実施した。尚、ゼミ生が全盲体験を行う際の安全確保やアレルギー疾患がある生徒に配慮したメニュー（生春巻き）の考案など、きめ細かな対応をして頂いた。班分けにおいても、一班に全盲・弱視・女子が入るように班構成がなされ、同じ視覚障害といっても人によって困難点・配慮点が違うことを理解できるようにして下さった。

寄宿舎生徒：高等部生徒 26名（有志）

グルーピング：5班作成（1班10名：視覚5名（全盲・弱視・女子）と駒場5名）

【当日の流れ】

- ① 寄宿舎到着後、班分け
- ② 班内で自己紹介
- ③ 舎内のルールについての説明（飯島先生）

ランチタイム

- ④ 班ごとに昼食（フリートーク）
- ⑤ 班内で交流（フリートーク）
- ⑥ 代表生徒の挨拶
- ⑦ 視覚障害の説明（2名）

生春巻きづくり

- ⑧ 説明
- ⑨ 役割分担：エビ・クリームチーズを切る（2名）レタス・ニラ・きゅうりを切る（4名）、ソースの調合（2名）、巻き方説明（2名）
- ⑩ 作業開始
- ⑪ 試食

交流会の進行は寄宿舎の高校3年B君が行った。B君からゼミ生に対して、交流会を楽しむための3つのアドバイスがあった。①「手引きの腕は振らないでください」あとは普通に歩いてくれればOKで

す。②とにかく僕たちを観察してください。やりたいこと、見たいものがあれば、どんどん近づいてみようとしています。その姿をよく観察してください。③とにかくコミュニケーションを楽しみましょう。この声かけにより、緊張がほどけリラックスして交流を楽しんでいた。

また、B君は寄宿舎の後輩へも「今回の交流は社会に出る前の練習でもあります。わからないことはわからないままにしないで、しっかり聞きましょう。自分たちのわからないところをちゃんと伝えましょう」等の声かけをしており、お互いが学び合う有意義な会にしようという気持ちが伝わってきた。

まず、ゼミ生は寄宿舎生に対し、視覚以外は普通の高校生と変わらない、明るくて面白い、優しい、思ったよりは隔たりがなかった、話すのが上手い等の印象を強く感じていた。

フリートークでは、お互い積極的に会話をする様子が見られた。横並びに座っていたので、右隣の人に話しかけてしまうと、左隣の人には聞こえない状態になり、話をする際の配慮の難しさに気づく生徒もいた。

生春巻きづくりでは、食材の配置や食材を切る大きさ、ライスペーパーの巻き方等をどう伝えればよいのか工夫を凝らしている姿が見られた。そして、積極的に生春巻きを作り、上手に包丁を使う寄宿舎生に驚いていた。ゼミ生より寄宿舎生の方がきれいに仕上がっている生春巻きもあり、視覚に障害があっても適切なサポートがあれば自分でできることが多いことに気づくよい機会となった。一方ゼミ生は、アイマスクをして、エビやニラを切ったり、生春巻きを巻いたり等、全盲体験をした。その結果、食材の場所などの空間把握や包丁でエビを均等な薄さで二つに切る感覚、調味料の計量で平衡感覚が分からなくなる感覚等、苦戦している様子が見られた。

これらを通して、「視覚障害の人への理解をもっと広めるべき」「寛容になれるような社会づくり」「広い心と視野を持つこと」「何ができて何ができないのかを正しく認識すること」「お互いに積極的に声掛けすること」「どのような場面で大変なのか理解すること」等実感を伴った理解が深まっていた。

また、「偏見がなくなった」「普通の人だと認識を改めた」「思っていたより、一人でできる人が多く驚いた」「少し手伝うことで容易にともに生きるこ

とができる」「コミュニケーションができれば、日常生活を送っていける」等、誤解・偏見や認識の変容が見られた。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

【調理体験（アイマスク着用、全盲体験）】

- ・目隠しして行動するとほとんど何もわからず、みんなに頼りたくなったので、視覚障害者には、普通の人以上に思いやりをもって接しなければいけない。
- ・アイマスクをすると野菜を切ったり、春巻きを巻くのは段違いに難しくなり、視覚が失われることでこんなにも変わるものだと実感した。

【交流より】

- ・すべての行動をやってあげるのではなく、できないことを助けることが大切。
- ・様々な工夫をすることで私たちと同じように行動しているということが分かった。
- ・常に状況を説明しないと取り残されてしまう感があった。ただ、その説明で会話が弾んで楽しかった。
- ・全盲の人が点字を読んでいる瞬間を初めて見たが、結構早く読んでいたので驚いた。料理を普通にしているすごいと感じた。
- ・人によって誘導が大変だったり、ぶつかることがあったので、対応が大変だと思う。
- ・晴眼者の人のことをどう思っているのか、結局今日はわからなかった。見えている人の方が早くできる作業はやってほしいと頼まれた。その時の気持ちまではわからない。ただ、そういう心の内を理解するには時間があるだろうから、いずれ知りたい。

3.6 第6回 研究室訪問（3時間）

東京大学先端科学技術研究センター

児玉龍彦教授（本校卒業生）

福島智教授（筑波大学附属盲学校卒業）

熊谷晋一郎特任講師

「先端研でバリアフリーや当事者研究を学ぶ」

児玉龍彦先生は本校卒業生（19th）であり、現在、システム生物学教授やアイソトープ総合センター長を務めている。1999年、東京大学先端科学技術研究センターで21世紀の先端研をどうするかを考える将来委員会の際に、児玉先生は「21世紀は人間内部に向かわ

なければならない。当然、障害を持っている人も、人間の形態なので、障害のある人を除外した人間の科学は不自然⁵⁾ という考えのもと、全盲ろうの福島智先生（附属盲学校卒業生）を招いている。

児玉先生にゼミの主旨を伝え、先端研で障害学を学びたい、児玉先生の知見をゼミ生に伝えてほしい、と依頼したところ、後輩のために福島智先生と熊谷晋一郎先生の講義も併せて、学びの場を設けてくださった。以下は、当日の流れである。

- ① 熊谷晋一郎先生 「当事者運動と当事者研究」
- ② 福島智先生 「光もなく音もない世界」
- ③ 児玉龍彦先生 「先端科学とバリアフリー」
～不良設定問題を解く～
- ④ 3人の先生方と質疑応答

熊谷晋一郎先生は小児科医で8年間の臨床を経て現在は先端研で勤務している当事者研究の第一人者。新生児仮死の後遺症により脳性麻痺の障害をもち、以後車椅子生活をしている。熊谷先生からは「障害はどこにあるのだろうか？」という問いから始まり、障害を「医学モデルと社会モデル」の観点から話され、「昔は医学モデルしかなく、健常者になるという目標設定」「impairment（身体的制約）と disability（社会の障壁や差別）」「1980年代の当事者運動との出会い」「親が死んだら自分はどうなるのか？という不安からの自立」「当事者研究」「言葉のバリアフリー、言葉の主流派に乗れない障害」について語られた。

福島智先生は、バリアフリー研究の第一人者。附属盲学校の卒業生で、現在は先端研の教授である。福島先生からは「9歳で視力を失い、18歳で聴覚を失い全盲聾（光もなく音もない世界）になったこと」「身体上の特性による困難よりも、精神的に非常に孤独であること」「指点字によるコミュニケーション」「自ら生きる意味」について語られた。

児玉龍彦先生は、システム生物学研究の話からバリアフリーの話と科学の見通しについて語られた。「科学の本質は頭脳の省エネ」「がん治療もバリアフリーも「軌跡 (trajectory) を考える」方向へ」「これからの科学は人間と社会に向き合う科学」「認知・認識の科学（科学の芸術化）に進んできている」「人間の経験をデータ化し、文学・工学・医学等を融合した科学へ」「人間の感性が問われる時代へ」「主流派、効率化のための切り捨ての危険性」「バリアフリーは障害学の現場主

義」「障害学は人間の多様性と共通性と複雑なメカニズムが見えてくる」等、多くの示唆ある講義であった。

3人の講義を受けて、後半は質疑応答を行った。ゼミ生からは「障害のある人と接するとき、どうしたらよいか？失礼にならない付き合い方は？」「50-70年代の医学モデルで手術や心の持ち方（努力）でリハビリをして実際症状がよくなった人はいるのか？」「障害の研究の最終目標は何か？何をモチベーションにしているのか？」「健常者と障害者に限らず、万人に良い共生環境はあるのか」等の質問が出て、それぞれの先生方から講義の内容をさらに深める回答があった。

ゼミ生は、統計学（モンテカルロ法）で軌跡を考える手法や障害学の基本概念、バリアフリー・コンフリクトの考え方、当事者研究等、最先端の専門的な話や先生方の人生や研究への思い等を聴き、多くの知見と気づき、今後の科学の見通し、そして今後の多様性のある社会の在り方等を考える良い機会となっていた。

以下、ゼミ生の印象に残ったキーワード（「 」内）と感想の一部を紹介する。

【熊谷先生に対して】

「困難なことでも乗り越えようとする姿勢」

- ・障害を持っていて一人で生活するのが難しい中、一人暮らしを決心した先生をすごいと思った。
- ・障害を持った自分が社会で生きていけるか不安だった幼少期、どうすれば生きていけるかを模索し、打ち勝っていったという話にとっても感動した。

「社会モデル」と「医学モデル」

- ・障害学を考えるうえで、昔は「社会モデル」がなかったということは意外であった。
- ・医学モデルと社会モデルを用いて、体系的に説明があり、障害の知識が整理され、深く考察できた。

「障害がどこにあるのか」

- ・障害者と健常者の間のコミュニケーションを挙げるのはとても新鮮に感じた。多くの人に身近に感じてもらえるチャンスとなると思った。
- ・障害はもともと本人にあるということを固定的な概念として持っていたので、ハッと気が付かされた。「どこまで社会が変わり、どこまで障害者が変わらなければならないのか」
- ・障害者のみに大きい負担を強いらせないという考え方で、いい言葉であると思った。

「impairment と disability」

- ・この二つの概念をしっかりと区別して理解することが障害の理解への第一歩となると思う。当事者研究もこの分野の発展に繋がっていくと思う。
- ・障害を本質的に捉えるという考え方を持つと、「主流派」にカテゴライズされた人間（自分も含めて）にも何をやるべきかが見えてきた。

「当事者研究」

- ・障害者自身が指揮をとって、障害の問題に取り組む当事者研究は、健常者だけで積み上げられてきた研究に新しい光を投げかける画期的なものだった。
- ・当事者の欲求不満が課題を明確化する。障害の責任を当事者に帰責させない。
- ・わかりやすいバリアフリーだけではなく、どうすれば言葉（道具のひとつ）をバリアフリー化できるか考えていきたい。

【福島先生に対して】

「指点字」

- ・指点字の存在を初めて知った。すごいと思った。

「コミュニケーション」

- ・コミュニケーションは自分を社会の中の一員であると自覚する唯一の方法。与えられた条件で今自分には何ができるかを考える姿勢はぜひ見習いたい。
- ・人生における会話の大切さがわかった。
- ・障害の人と付き合うときにはマニュアルなどない。健常者と一緒に人それぞれ。

「生きる意味、光も音もない世界」

- ・視覚のみならず、聴覚を失われた際に、コミュニケーションをとることができることの重要性、必要性について痛感させられたという話が興味深かった。
- ・「世界から取り残される感覚」があったとのこと。いかに大きな衝撃であったのかを実感した。
- ・生きる意味、等哲学的な内容に心を惹かれた。
- ・当事者として、どんな心情であったか、どのように考えて、今に至るのかが伝わってきた。

「バリアフリー」

- ・バリアフリーを囲っているバリアを取り払うという言葉は、とても現状を的確に表していると思う。

【児玉先生に対して】

「科学」

- ・障害と科学は時代とともに変化してきているので、広い視野をもって、多くのことに取組めたらと思う。

- ・考察するために推測し、与えられた事実を用いて推論を修正していく方法は、複雑な現状を少しでも理解するためにとってもよい方法だと思った。
- ・身近な例を数学的に捉えていて、とても興味深かった。モンテカルロ法について興味を持った。
- ・物事を考える際は、自分と対象の大きさ、次元を正確に理解し、いかに必要な要因をピックアップして考察するかが大事だと思った。
- ・みんなのためになる研究という発想はとても大切なことだと思った。

「多様性」

- ・多様性・価値観の違いから新しいものが生まれる。
- ・多様性は研究する上で大切だと思った。障害者に必要なことは障害者にしかわからないと思うので、実際に障害者を招くのはとても良いアイデアだと思った。

「主流的、効率化のための切り捨てる危険性」

- ・自分の目標とする1点に向かって、ただ切り詰めていくという考えが、いつの間にか違った方向へ進んでしまうことがある。様々な視点から考えることが大事。
- ・当事者、現象とデータのずれを修正していかないといけない。外へ拡張し、突き詰めていだけでなく、内側へ立ち返ることは時に必要。
- ・物事の次元が下がり、単純化していくのは恐ろしいものだと感じる。何かをどんどん切り捨てるのではなく、ある程度、取捨選択しなくてはならないと思った。

【全体を通して】

- ・障害に関して、当事者が研究をしているという発想はとても新しいと感じた。周りから孤独にならないように心掛けなければと思った。
- ・障害者本人が研究をしていることでより良い改善策が出ると思う。将来日本を引っ張っていく立場になったら、取捨選択を慎重にしていきたい。
- ・障害者との関わり方、バリアフリー化にはまだまだ課題があると感じた。そんな中で障害者は色々工夫をして生きていると知り、もっとバリアフリーが進み、人々が障害をよく知る世界となるといいと思った。
- ・バリアフリーは、一つの最適解が出て終わりというものではなく、様々な立場の人間が合意を形成しようとするプロセスの中で互いの状況について相互に理解し合い、納得して、偏差を極力減らすことを1

度ではなく、何度も繰り返していくものなのだと分かった。従って、われわれは社会に出ていく中で、この問題について考え続けていかななくてはならないと思った。

- ・「障害者と付き合うのにマニュアルなんてない！」「多様性」「バリアフリー・コンフリクト」今日だけでいろんな障害に関する知識を少しずつだが学ぶことができた。この知識を世の中に広げていかなければ意味はないと思う。自分のできることから少しでも貢献できればと感じた。多くのことを切り捨てず、広い世界をもてたらと思う。
- ・極端な人、普通の人、多様性はとても大事。
- ・障害は多様性の一つ。バリアフリー・コンフリクトの問題の答えは一つでない。多様な意見を持った人々が集まって答えを創造していくことが大切だと思った。
- ・健常者と障害者を分離、それぞれの文化を構築しようという運動がかつてあったということには驚いた。健常者・障害者の問題は、一つの視点だけではなく、様々な視点から考えることが大事なんだと思う。
- ・障害に対して、前向きな意見をもって、次の世代をよくしていくことが重要。

3.7 第7回 聴覚障害について (3時間)

3.7.1 聴覚特別支援学校 (聾学校) 卒業生

ありがとうの種代表 兼 -Social Cafe - Sign with Me オーナー 柳匡裕氏 (手話通訳者2名)

「ろう者で起業するということ」

～当事者問題をビジネスで解決する～

柳氏は昨年に引き続き講師を担当している一人で、障害者が「ありがとう」と言われ、自尊心を持てる社会の実現をめざし、手話カフェを開業している。柳氏の話は、日本手話通訳者(2人)はいるが、できる限り自分の手話や表情を見て、受講してほしいとの声かけから始まった。

内容は、「耳は痕跡器官」「社会の中で障害を被っているゆえの障害者」「障害者の就労問題(聴覚言語障害は他の障害より正社員率、昇進率、所得が低い)」「障害の本質は」「障害者の福祉漬け(ゆでカエルの法則)の現状・手のひらの自立」「人間の究極の幸せとは」「働くことで有難う=社会とつながる幸せ」「ありがとうの種」「オーナーシップ」「ろう者の望む社会(動画紹介)」「解決方法例(インクルーシブデザインの考え方)」「当事者として雇用創出、職域開発、ロールモデルの発信」「手話者が能力を発揮できる環境づくり」「聴者主体か

ら聴者を手話の世界へ」が語られた。

柳氏の講演でゼミ生は、コミュニケーションの困難から就労や昇進が難しい現状、障害者が自立できない福祉制度等、聴覚障害者が置かれている社会の現状や、柳氏が飲食店を立ち上げた思い(当事者が当事者の雇用創出、当事者の職域開発、当事者のロールモデルの発信)、インクルーシブデザインの発想(ウォシュレットトイレのように、「個(障害者)」から発想したものを一般の人にも使えるようにする)等、障害者からみた自立および発想の観点を学ぶことができた。また、「ろう者であることを障害と想ったことは一度もない。だけど障害者であることを受け入れている」という柳氏の考え方や「聴者から見た望ましい社会」と「ろう者が望む社会」の違いに驚くゼミ生が多く、「物事を自分たちの視点でしか考えていなかった」「障害という概念は社会から押し付けられたものなのかもしれない」と自分たちの考え方を改める様子が伺われた。

以下、ゼミ生の感想を一部抜粋した。

- ・東大赤門前にお店を開き、将来を担う東大生に存在を知ってもらおうという発想は感心した。
- ・ろう者にとって「耳は痕跡器官」という概念があることが印象に残った。
- ・当事者の視点で考えることが大切だと感じた。
- ・障害は人に帰属するものではなく、社会のギャップであるということ。
- ・障害者に合わせた製品・デザインを作ろうとすると金銭的な面からも望まないもの(市場性が低い)になることを知った。
- ・インクルーシブデザインでも市場になりうるものもあると感じる。やはり、使う人の立場・意見が大事。
- ・自分とろう者との感覚の差を感じた。
- ・手話はイメージしやすい動きが多いことがわかった。
- ・手話が共通語の世界の映像が印象に残った。
- ・社会を「言語」という視点からも多様化させることが必要だと思った。
- ・当事者による解決と健聴者による解決の違いについてよく理解した。両者をよく理解したうえで、うまくバランスをとっていくことが必要だと思った。
- ・手話を普及させたいと感じた。
- ・幸せは他の人との関係性で現れるというのはとても印象的であった。ろう者とのコミュニケーションはとても大切にすべきだと思った。
- ・聴覚があるからと言って幸せではないと感じた。

3.7.2 東京大学医学部医学科6年

鉄門手話の会代表 辻賢太郎（本校卒業生）

「聴覚障害と医療—その溝を埋めるには—」

辻氏は本校卒業生（58th）であり、東京大学医学部学生主催「鉄門手話の会」を立ち上げ、東京大学のバリアフリーシンポジウムでは学生手話通訳者も経験している。また、柳氏を手話サークルの講師として招いて、聴覚障害について熱心に学んでいる学生である。

辻氏からは「手話を始めたきっかけ」「手話サークル設立までの経緯」「手話を学んで初めて知ったこと」「お医者さんが、手話ができたらうれしいという期待」「聴覚障害者の受療時の問題」「医学生から見た聴覚障害」「医療従事者が聴覚障害者とかかわる場面」「医療手話」「人工内耳」「聞こえない医師」「手話通訳の供給体制」「聴覚障害者の非均質性」「色々な聴覚障害」「ろう者の Identity の問題」「ともにいきるとは」等、多岐にわたる内容が語られた。

ゼミ生は、聴覚障害者が「突発的な症状や救急搬送の際、手話通訳者の依頼ができず、命にもかかわることがある」「手話通訳者がいても病気の説明が正確に伝わっているか分からない」「病気の症状でオノマトペ（擬音語）をうまく表現する手話が見当たらない」等、医療場面での困難さや、命にかかわる深刻な状況があることを知り、聴覚障害者の立場に立って考えること、視点を変えて考えることの重要性を学んだ。また、辻氏から社会の在り方を「障害がある」と「障害がない」、「支援する側」と「支援される側」の境界線がある 2 項対立で考えるのではなく、境界線を排除し、一人一人の「個」が異なる他者の存在として「ともにいきるとする考え方を、図式化したものとともに説明があり、「無意識のうちに健常者と障害者を分けて考えていた」自分に気付き、障害の捉え方や多様性について深く考究する記述がみられた。

以下、生徒の感想を一部紹介する。

- ・医療受診の際、どこで問題が起きるのがわかった。
- ・医師が様々な種類の障害者とのコミュニケーション手段を身につけておく必要があるが、今の社会ではあまり重視されていない。
- ・医療手話を初めて知った。手話は普通言語と同じくらいの多様性があると思った。
- ・人工内耳はろう者が必ずしも使いたいとは思っていないことが印象に残った。
- ・聴覚障害者でも話せる人もいればそうでない人もい

ることがわかった。

- ・我々は障害者のことをわからないために区別してカテゴリーに分けてしまうが、そのことこそが「属す」ことが必要だと思わせてしまうのではないかと思った。
- ・みんなのことを考えているつもりでも、どうしても自分は健常者の立場から物事を考えてしまっているということに気づかされた。
- ・聴覚障害者と医療という視点を変えるだけで思ってもいなかった発見があるので、視点を変える努力をするのは大切だと思った。
- ・自分たちに求められていることは、聴覚障害について理解するだけでなく、何らかのアクションを起こすことではないか。色々な問題があるのを踏まえたうえで、自分に何ができると考えていきたい。
- ・お互いに違う人々が「ともにいきると」という考え方はこれからの障害医学やその他の障害に関する様々なことに役立つと思う。
- ・最後の図式は、ハンディを持っているかないかで分けるのではなく、皆同じであるとするのではなく、ハンディも個性の一つとして、一人ひとりが共に生きるということを考えるうえで有効であると感じた。

3.8 最終回

2015 年度のゼミはあと 1 回で終了となる。第 8 回（1/23 実施）では大塚特別支援学校 小学部生徒 24 名が本校に訪問し、一緒に企画を楽しむことを検討している。

現段階での打ち合わせでは、①アイスブレイク（歌・ダンス・自己紹介ゲーム）②鳴門踊り（大塚特別支援学校より）+本校生徒の和太鼓、③ジャグリングショー（本校ジャグリング同好会の協力）④科学実験（人工イクラ・コップつぶし）を行う予定である。

4 考察

今年度のゼミは、ステレオタイプな認識（障害者は自分とは違うかけ離れた近寄りたくない存在、障害（者）は不自由でかわいそうな存在、常に援助が必要など）をしている高校生に、障害（者）への関心を一層高め、誰もが住みやすい社会の構想をし、それを実現するための一助となるよう企画・実施を試みた。

ゼミの構成は①講義、②疑似体験、③交流及び共同学習の 3 部に構成した。①では、障害の捉え方や理論、障害特性についての基礎知識、最新の動向、当事者研

究、バリアフリー研究。②では、体験学習の機会が乏しい読話による難聴疑似体験、ロービジョン、透光体混濁・白濁、視野狭窄、屈折異常。③では、同世代の障害（者）との交流や共同作業により、障害（者）に対する誤認識・偏見の払拭。これらの内容を本校生徒の特性を考慮し、より深い学びになるように年間プログラムを構成した。また上記のような、広い視野に立った学習によって、**社会は多様な人間で構成されるのが本来あるべき姿である**という知性と感性を磨くプログラムになるよう心がけた。

障害種別では、発達障害、知的障害、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由について学んだ。講義では、特別支援学校教員・教授、経営者（当事者）・研究者（当事者）、科学者、家族、手話学習者等、様々な視点・立場からの話や問題提起があった。また、交流では小学部、高等部、社会人と、さまざまな年齢層の当事者からの語りとかかわりがあった。疑似体験では、車椅子、聴覚（難聴）、視覚（弱視・全盲）を体験し、困難点や心理的影響、適切なサポート等を学んだ。

初回の講義では、「障害とは何か？発達障害とは」というテーマで、特に発達障害に焦点を当てた総論を講義して頂いたことで、見えない障害に対する理解を促す学習ができた。障害者の存在は全体の10%であること、障害者への配慮は個人の思いやりだけでなく、国の制度として合理的配慮が求められる時代になってきている等、最新の動向等の知見に触れることができた。また、障害は周囲の理解と適切な配慮があることの大切さを学んだ。

各グループで「障害にかかわる根本的な問い」をテーマに討議しプレゼンする経験では、今まで「障害」に対して深く考えることがなかったゼミ生にとって、とても新鮮で有意義なものであった。障害者の価値、差別や偏見・誤解、多様性、幸福等、解答のない難しいテーマではあったものの、「障害」を定義し、「障害」を問う大切さに気付き、人間や自分の価値、人間理解を深めることにも繋がる取り組みであった。ゼミ生の感想からも、初回到障害について考究する機会があったのは有効であったことがわかる。

肢体不自由の障害理解については、本人及び家族一人一人の言葉で語る思いやメッセージはとても重みがあり、ゼミ生の心に響いている様子が伺われた。特に、A君の「障害の説明を受けて、ショックや悲しさはなかった。出会いを大切に、自分の体と上手に付き合いながら生きていこう」という言葉や、兄の「余計な同情を買いたくない」という気持ち、母の「立って

歩けるといいな」という思いは、ハンディを持っている本人・家族だからこそ言葉・気持ち・思いであり、それらを直接聴くことができる貴重な時間であった。また、城戸先生からはご家族の言葉のキーワードに対して専門的な解説が加わり、ご家族の話が1つの事例としてとどまることなく、肢体不自由・車椅子生活に対する障害理解が深まっていった。ゼミ生は、「家族みんなが障害に対しマイナスのイメージを持っていないこと」が分かり、「本人は障害があると意識していないのに、自分が「障害がある人」として見てしまう自分に悲しくなった」「かわいそうであると思ってしまう」ことに気づき、障害（者）に対する認識を改めることとなった。

また父から、車椅子生活の視点での社会や本校校舎の構造に対する問題提起があったことで、普段なげなく生活していた空間を少し立ち止まって「合理的配慮」の視点で見直す目を養うことができた。このような問いがなければ、気づくことなく生活していただろう。尚、A君が文化祭に来た際、ゼミ生を含む本校生徒が校舎内に入る段差で車椅子の介助していた。このように、理解や認識が深まれば、自然と必要に応じた支援ができるようになる。この行動は目に見えるゼミの一定の成果であった。

交流では、聴覚特別支援学校と視覚特別支援学校寄宿舎生との交流を行うにあたり、事前学習として講義と疑似体験を実施した。講義では障害特性を始め、助けが必要な時に助けを求めるのが難しい等の障害者の心情やコミュニケーションのコツなどを学んだ。疑似体験ではヘッドホンやアイマスクを使用した体験活動により講義で学んだ障害者の生活における不便性・困難点と不安感や疎外感等の心的影響や、どのような配慮やサポートがあれば困難が克服できるのかを学び、実感を伴った理解へとつなげることができた。

実際の交流では、どのように交流したらよいかわからず緊張や不安を持っていたゼミ生であったが、徐々に積極的にコミュニケーションをする姿が見られた。交流後には、障害を持っても明るく好奇心旺盛で普通の高校生であったとの感想がほとんどであった。なかには、先入観によりかかわりを避けてきたことへの恥ずかしさや申し訳なさを感じる生徒もいた。同世代同士でのかかわりの中で、自分と同じ悩みや趣味や遊びをしていること、障害があってもできることが多いこと、少しの配慮で自分たちと変わらぬ生活ができること等に気づくことができた。また、同じ障害でも一人一人障害の程度が違うことを認識し、できること

とできないことを知った上で、できないことへの支援が大切であること等、かかわり方や支援の在り方への理解を深めていた。交流後の感想では、先述のように「もっと話をしたかった」「また交流する機会を持ちたい」との感想も多くあった。聴覚特別支援学校の訪問後に SNS でつながって交流を続けているゼミ生もいて、子どもたちのつながろうとする力の強さを感じる。障害の垣根を高くしているのは、社会をつくっている大人なのではないかと強く感じる。

肢体不自由、聴覚障害、視覚障害の交流を通してわかったことが三つあった。一つ目は、**子どもたちの感受性、認識力、社会性の高さ**である。聴覚特別支援学校では、筆談で「〇〇だよね～」と普通に会話したり、手話を使えないゼミ生に積極的にコミュニケーションをとる姿があり、視覚特別支援学校では喉を痛めた寄宿舎生がスマホのメモ機能を使って積極的に会話をしようとしていた。つながろうとする気持ちがあれば、いろいろな手段・手法を工夫してコミュニケーションはできるということを実証してくれた。二つ目は、交流をより効果的にするためには、**事前学習・疑似体験や専門家の解説・指導・助言を組み合わせる**こと。基礎知識と疑似体験は、障害者の立場に立った視点や障害による困難点に対する配慮、思いやりにつながり、結果、「楽しかった」「また交流したい」という気持ちになったと考えられる。三つ目は、ゲームや調理など**一緒に取り組む実践は非常に有効**であったこと。ともに取り組み、ともに楽しむという状況であったからこそ、両者をより身近に感じ、楽しかった、もっと話してみたかった、という声につながったと考える。後日談であるが、「筑駒生は頭がよくて冗談とか言わない（笑わない）硬い人というイメージだったが、普通の高校生だった」との感想をいただいた。楽しみながら一緒に取り組むことは、障害理解のみならず、お互いの先入観、誤解・偏見を変える良いきっかけになることが改めてわかった。

今年度、初めての取り組みの一つとして、東京大学先端科学技術研究センターでの講義があった。本校卒業生の児玉先生からは、がんの治療や放射線の研究を専門とする先生が先端研に全盲聾の福島先生を招いた経緯や、科学の幅広い知見を語って頂いた。福島先生と熊谷先生からは、ご自身の障害や当事者としての視点を大事にされた研究の話や語り、先生方の生い立ちや気持ちの変化、考え方に触れることができた。また、多様性・価値観の違いを認め合い、コミュニケーションの重要性を再認識する貴重な機会となった。

講義では、障害の概念を体系的に学び、今まで学んできた障害の知識が整理され、障害を本質的に捉えるという考え方ができるようになったゼミ生も多い。また、当事者研究や指点字等、新たな見識に出会い、この分野の奥深さに気づくゼミ生もいた。質疑応答では、3人の先生方の研究者としての姿勢や考え方に触れ、今までのゼミとは志向の違った視点で障害について深く学ぶことができた。

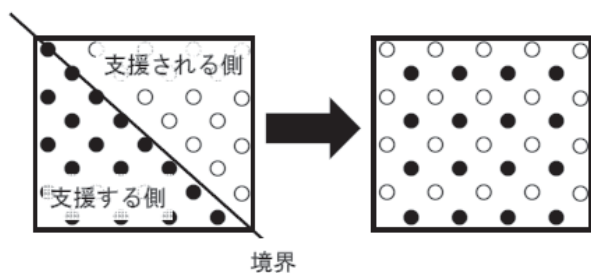
講義と質疑応答を通して、ゼミ生の記憶に深く残ったキーワードは「医学モデルと社会モデルの概念」「impairment と disability」「どこまで社会が変わり、どこまで障害者が変わらなければならないのか」「多様性・価値観の違いの必要性」「当事者研究」「バリアフリー・コンフリクト」「主流的・効率化のための切り捨ての危険性」「対立・衝突・摩擦も含むコミュニケーションの必要性」「障害者と付き合うのにマニュアルはない」「社会の障害と科学は時代とともに変化している」等、多岐にわたっていた。

児玉先生からの「世に役立つ、人に喜んでもらえる研究、人に役立つ研究をしてほしい」という強いメッセージとともに、「社会に価値があるのは医師・弁護士や偉いとか高いとか強いだけが「主流派」の価値観になってしまうと 99%は切り捨てられ、どんどん社会が圧縮していき、危険な方向に進んでいく。怖いことである」「筑駒という非常に特殊な状況にある」という言葉を受けて、ゼミ生は、自分自身にかかわる問題であると捉え、未来を拓く社会の一員として、多様な意見を持った人々とともに「創造」し、自分のできることから「貢献」していこうと考えていた。ゼミ生の感想でも「多くのことを切り捨てずに、広い世界を持たらと思う」「将来日本を引っ張っていく立場になったら、取捨選択を慎重にしていきたい」「もっとバリアフリーが進み、人々が障害についてよく知る世界になるといい」「我々が社会に出ていく中で、この問題について考え続けていかなければならない」「今回学んだ知識を世の中に広げていかなければ意味がない」「健常者・障害者の問題は、一つの視点だけで考えるわけではなく、さまざまな視点から考えることが大事」との広い視野で、今後の自分のあり方を模索する記述が目立った。今回の研究（者）の視点からのアプローチは、ゼミ生にとって、ともにいきる社会を深く考究する機会として有効であったと考える。

柳氏の講話では、ろう者の雇用の実態や障害者の福祉制度などの社会の現状、インクルーシブデザインの考え方等、他の講義では学ぶことのなかった内容が多

く、新たな知見が得られた。また、柳氏の手話や表情等を見ることで、手話はイメージしやすい動きが多いことが分かり、手話への認識を改めるきっかけとなった。特に印象に残る内容として、柳氏の「ろう者であることを障害と受けたことは一度もない。ただ障害者であることを受け入れている」という考え方や「ろう者の望む社会」と「健常者が望んでいる社会」の動画から当事者と健常者の視点・考え方の違いに驚き、「障害という概念は社会から押し付けられたものなのかもしれない」「当事者による解決と健聴者による解決には違いがあり、両者をよく理解したうえで、うまくバランスをとっていくことが必要」等、新たな視点で深く考えるきっかけにもなった。

本校の卒業生でもあり、手話学習者でもある辻氏の話では、医療現場での聴覚障害者が抱えている問題や医療現場側の支援体制の不十分さ、手話学習者から見たろう者の多様性等が語られた。さまざまな課題や問題点が明らかとなり、事象に対して視点を変えてみることの大切さや理解するのみならず、行動を起こすことの必要性を感じ、手話を学びたいと記述するゼミ生も出てきた。また、辻氏から「障害がある」と「障害がない」、「支援する側」と「支援される側」の境界線のある2項対立の考え方から脱却し、境界線を排除した一人一人の「個」が異なる他者として存在する「ともに生きる」という考え方の提案があった(下図)。



辻氏の考え方に触れ、「無意識のうちに健常者と障害者を分けて考えていた」「皆のことを考えているつもりでも、健常者の立場から物事を考えてしまっている自分に気づいた」等、知らず知らずできている心的な「バリア」に気づき、改めて「ともに生きる」とはどのようなことか、どうしていけばよいのかを一人一人が深く考える機会となっていた。年齢の近い先輩であり、医療現場に携わる視点からのアプローチは、ゼミ生のモデルになったと考えられ、今後も継続したい。

今年度のゼミは、教育・交流・研究・社会とそれぞれ違った切り口で障害理解のアプローチを試みた。ゼミ生の活動の様子や感想から、どの回においても障害

(者)に関する理解が深まる内容であり、社会は多様な人間で構成されるのが本来あるべき姿であるという知性と感性を磨くプログラム構成になったと考える。

特に、本校生徒においては、障害特性の学習や疑似体験、交流とともに、理論や研究といった内容や社会人や研究者、卒業生等の交流・講話が、より深い理解につながることをわかった。その結果、「いろいろな問題があることを踏まえたうえで、自分に何ができるのか考えていきたい(自分への課題)」、「自分たちに求められていることは、障害を理解するだけでなく、何らかのアクションを起こすことではないか(自分たちへの課題)」、「もっと知識を広めていくことが大事(周囲への理解啓発)」、「障害者のことをわからないために区別してカテゴリーに分けてしまうが、そのことこそが彼らに「属す」ことが必要だと思わせてしまうのではないか(問題提起)」、「もっと社会の環境を改善したほうが良い(社会の改善)」等の考え方ができるようになったと考えられる。これらのことから、これから様々な学際領域で活躍するであろう若い世代たちにとって本ゼミは意味深いものであったと考える。

柘植先生の講義でもあったように、障害に関わる根本的な問いにはこれが正しいという解答がない。このゼミをきっかけに今後も障害を抱える人の立場に立った視点や考え方に思いを寄せ、ともに生きる社会の実現に向けて挑戦し、様々な分野で貢献して欲しい。

今後の課題として、現状では年間を通して学んだことをまとめ、深く考察できる機会がない。可能であれば、第1回目のグループワークのように、最後にもう一度、「障害とは何か」「ともに生きる」等を考察し、ゼミ生同士で共有できる場を設ける等して、さらにこのゼミの企画をブラッシュアップしていきたい。

今年度、筑波大学主催で「黒姫インクルーシブ合宿」が実施された。特別支援校の生徒(視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・知的障害・発達障害等)と普通附属校の生徒(多様な視点で招集)が集まり、色々な障壁を相互理解の中で解決するプロセスを体験できるとても有意義な機会であった。将来的には、このようなバリアフリー・コンフリクトについて考える機会を各附属校と連携をしながら取り組んでいきたいと考えている。全国に類を見ない、各障害種別の特別支援学校や特別支援教育研究センターを有する筑波大学附属だからこそできる企画である。また、各附属校の卒業生や関係者の方々にもご協力を頂きながら、本ゼミを端緒として「ともに生きる」社会の礎をつくりたいと考えている。

【謝辞】

このゼミの実現に際しては、附属特別支援学校の先生方・児童・生徒および卒業生やそのご家族、筑波大学の柘植雅彦教授、東京大学先端科学技術センターの児玉龍彦教授、福島智教授、熊谷晋一郎特任講師、ありがたいの種&・Social Cafe・Sign with Me オーナー柳匡裕氏、本校卒業生である辻賢太郎氏、そして本校校長林久喜先生のご理解・ご協力をいただきました。心から感謝の気持ちとお礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

【参考文献】

01. 笹森洋樹等 (2014) 「高等学校における発達障害等の特別な支援を必要とする生徒への指導・支援に関する研究」 国立特別支援教育総合研究所
02. 柘植雅彦 (2010) 高校生に発達障害の授業をしてみた。 LD 研究, 19, 3, 190.
03. 障害者施策 内閣府
04. 東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター (2011) 「活動報告」
05. 早貸千代子他 (2014) 「障害科学ゼミナール「ともいきる」の実践報告」 筑波大学附属駒場中・高等学校紀要第 54 集
06. 鈴木牧子 (2014) 「聴覚障害生徒を対象とした『難聴疑似体験プログラム』の実践」 筑波大学特別支援教育研究 第 8 巻 p46-59
07. 芝田裕一 (2013) 「人間理解を基礎とする障害理解教育の在り方」 兵庫教育大学研究紀要 第 43 巻 p25-36
08. 中村義行 (2011) 「佛教大学教育学部学会紀要」 第 10 号 p1-10
09. 日本学術会議 (2003) 「差別意識の解消のための教育」 障害者との共生社会特別委員会
10. 山崎裕子 (2006) 「障害を「理解する」とは何か？」 第 29 回法政大学懸賞論文